

パターンを発見しても、どのように使っていくかを設計しなくては、意味がありません。基本的に連想に使っていくこと。ただし、インテリジェントが高く、連想データのように知識ベースを解析して、もとのパターンを具体化していくというものです。

(例文1) 私は三水村にいった。

この例文は、(go,agent_case,私,to_case,三水村) というコマンドデータに落とされます。その一方で、よくあるパターンは、

(パターン1) (go,agent_case,ND,aim_case,ND,to_case,ND)

で、その例として、

(例文2) 私はお参りに三水村に行った。

というように、目的地に行く目的というものがあるのが普通です。このように、文の中で、欠けた(格,オブジェクト)ペアを発見して、そのための知識ベースの解析を起動していく切っ掛けを作るのがパターンなのです。ただの連想でない、インテリジェントなものです。

パターンによって解析プロセスが起動されねばならないですが、その解析プロセスは機械学習で得ていくものにしなければなりません。環境が変わっても、柔軟に適応していくような人工知能にしたいからです。解析プロセスの発火はパターンの中の格情報と、格が支配するオブジェクトの意味、品詞などの情報から重み付投票で行うとよろしい。解析プロセスをどう構築していくか、ですが、どんなオントロジー記号をもとめていくかという、目的があって、そのオントロジーを引き起こしたり、オントロジーが発火すると起動されるアクションの結果がどうなるかというようなデータマイニングから得られる情報からの推定・・・つまり、機械学習そのものなのです。

例えば、原因・結果ですと、時系列で発生するコンセプトが基本的に候補となります。そのほかに、今発火している文に最も近い連想対象であるとか、文脈からの連想であるとか、構造的な因果関係情報とか、そんなものの重み付投票で原因・結果を得て行きます。目標ですと、「行く」と「三水村」と、その時の行事とかで、その行事に出席することだと解析していくこととなります。目標はオントロジーで決められた基本概念なのです。だから、曖昧性なく、解析できるプロセスを構成できるでしょう。

おわり